

## +1 (プラスワン)



## 「主プレヒコール！」

牧師 横山順一

今年は宗教改革から五百年の節目だとして、あれこれの記念行事が予定されている。

わが日本基督教団でも、信徒の友九月・十月号では宗教改革の特集が組まれるし、大々的な集会も準備されているようだ。

一五一七年十月三十一日、ルターはドイツのヴァイテンベルク城門に、九十五箇条の提題を張り付けた（ちなみにこの時日本は足利時代）。

いわゆる免罪符など、腐敗しきつた当時のカトリック教会、その行き過ぎた権威に対する課題と疑問を書き付け、これが宗教改革の発端となった。

そのおよそ七十年ほど前（正確な年号は分からない）、同じドイツで、グーテンベルクによる活版印刷技術が発明された。

それに合わせ、インクや紙の技術も飛躍的に進歩していった。それらがあつてこそ、ルターの提題はドイツ国内に知らされ、宗教改

革の波が急速に広まったのだ。

もちろん、ルターの示した勇氣ある行動は素晴らしい。が、それを知らせる手立てが幸いにしてあり、賛同する同志が増えて行つた、その歴史のシンクロナイティ（同時性）を忘れる訳にはゆかない。

燎原の火のように広がってゆく改革の勢いに、カトリック教会も対抗改革を進めた。ザビエルが鹿児島に来たのは一五四九年だからルターの行動からわずか三十二年後である。

このスピードに驚かされる。確かにルター一人がつけた灯だったが、「変えたい」「変えなければ」と心中思っていた多くの賛同者がそれを大きなたいまつにした。私たちの信仰は、そこに繋がっていて、一つのルーツだ。一つの、というのは、真のルーツが更に遡ってイエスにあることは言うまでもない。

五百年を記念することに水を差すつもりはない。しかし、中身が問われる。数字自体には意味はないし、ただのお祭りなら関心は沸かない。

それより、プロテスタントと呼

ばれることの内実を検証することこそが、今必要なことではないか。「教育勅語」が今更持ち上げられている。良い内容だって込められているから、と言われる。

そういう問題ではない。戦前を信奉し、その復活を自論む人々は、あの手この手を使って戦後タブー（封印）にされたはずのものを美化して持ち出す。

日本古来の伝統が、間違つた教育のために奪われたと宣伝する。その手先が日教組であり、朝日新聞であり・などやり玉に挙げてバッシングを繰り返して、一定の成果を見ている。黙っていると、ますます亡霊がのさばるばかりだ。ルターはこれはおかしいと「声を挙げた」のだ。共感した人たちも。そもそも発端のイエスがそうだった。

私たちは信仰によってプロテスタント（抗議する）者である。目の前の課題から目を背け、耳を塞ぎ、口を閉ざすなら、いくら五百年を喧伝しても漫画だろう。

宗教改革は、ただ宗教を変えたのではない。自分を変え、生活を変え、世界を変えた。